デニショーン時代に（1914～1931）関する研究

片岡康子
山田敦子

ルース・セント・デニス（Ruth St. Denis, 1877～1968）とテッド・ショーン（Ted Shawn, 1891～1972）は，1914年8月13日，ニューヨークで結婚。この時から2人の芸術家による共同の舞踊活動が本格的に，始まった。デニショーン時代の幕あけである。

デニショーン・カンパニーの公演活動

（表1参照）

デニスとショーンは，結婚後一週間も経たない8月19日から，早速デニショーンの全米公演旅行を開始。1915年夏，最初のデニショーン・スクールをロスアンジェルスに開校。

第Ⅰ期（1914～1921）は，カンパニーと学校を維持する財政獲得のために，その活動の約80％がボードビル・ツアーであった。

第Ⅱ期（1922～1926）の活動は，第Ⅰ期とは異なり，約95％がコンサート・ツアーである。第Ⅰ期にデニショーンの名前と舞踊を広くアピールしながら実力をつけてきた努力が実った時期といえる。1922～1925年にわたって全米各地に大規模なコンサート・ツアーを行っているが，これによってデニショーン・カンパニーは芸術舞踊の世界に高い位置を確保することになる。この時期がデニショーンの全盛期であった。第Ⅱ期のプログラムで，デニショーンのレパートリーが完成したといえる。すなわち，音楽の視覚化による作品集，東洋の作品集，劇的作品集，小品集といったレパートリーである。

第Ⅲ期（1927～1931）は再びボードビル・ツアーが始まる。1921年に開校したニューヨーク・スクールを本部として確立する資金集めが目的であった。しかし，このツアーへの反対から主要メンバーが次々と退団し，次第に衰退の兆しをみせ始める。1929年以降は，デニスとショーンが別々の道を歩き始め，デニショーンは事実上分裂する。公演活動はばらばらな形態ながらも，1931年まで続けられた。デニスとショーンの芸術家としての葛藤が導びいた結論であろう。

表1．デニショーン・カンパニーの公演日数　（1914.4.13～1931.8.28）

期	年代	Concert	Vaudevill		1年間の公演日数
Ⅰ	1914	137			137
	1915	104			104
	1916	25	116		141
	1917		22		22
	1918		172		172
	1919	1	211	CO・D 35Ⓒ CO・S 41Ⓒ, 422Ⓥ CO・S・D 30Ⓒ,155Ⓥ	212
	1920	29	293		322
	1921	66	73		139
Ⅱ	1922	71	42		113
	1923	155			155
	1924	169			169
	1925	175		東洋ツアー 1925.9.1～1926.11.11 210日	175
	1926	231			231
Ⅲ	1927	66	83		149
	1928	10	122		132
	1929	79		D・S 56　CO・S・D 14 D　1　CO・S　8	79
	1930	28		D・S 12　CO・S・D 3 S　5　CO・S　8	28
	1931	35		CO・S 32　CO・S・D 3	35
小計		1,381	1,134		
計		2,515			

（註）Concert　Vaudevill

D・S ＝ Denis と Shawn
D ＝ Denis
CO・S ＝ Denishawn と Shawn
CO・S・D ＝ Denishawn と Shawn と Denis

デニショーン・スクール

開校当時のスクールの活動は主に屋外でなされ，自然で健康な生活，精神的に豊かな生活が強調されていた。そしてスクールは，ショーンとデニスの思想や舞踊を啓蒙する場であり，集団生活の場であった。

デニショーン・スクールのカリキュラム[1]は下記のようであり，それは多様な舞踊の訓練をとりいれた総合的なカリキュラムであった。

1. オリエンタル・ダンス（ヨガを含む）＊
2. キャラクター・ダンス ＊
3. ナチュラル・ダンス ＊
4. バレエ ＊
5. デルサルト・エクササイズ
6. ダルクローズ・システム
7. 作品振付
8. 上演法
9. 舞台装置制作
10. 衣裳デザイン
11. 音楽の視覚化
12. アンサンブル・ダンス
13. ドイツ・モダン・ダンス

＊印は，1915年開校時に組まれていた内容。

また上記の他に時々，舞踊史や身体認識に関する講議が行われた。[2]

デニスとショーンは「既成の訓練方法を実践するよりも，独自の方法を持つべきである」[3]と考え，「個人の才能をあらゆる手段によってひきだそうとした」[4]のであった。その結果，彼らがめざしていた種々のタイプの舞踊家，マーサ・グラハム，ドリス・ハンフリー，チャールズ・ワイドマンらが育成されたとみることができる。

さてデニショーン・スクールにおける2人の役割についてみてみたい。デニスは「終始一貫して，デニショーン・スクールの組織は，テッドの考えや力に負うものであった」[5]とみており，「テッドの学校経営に対する意志や考えは，私よりも強固であり」，[6]ショーンは「自分自身のすべてを学校に賭けていた」[7]とその情熱を賞賛している。それにひきかえ「私は決して良い教師ではなかった。私はあまりにもエゴイストであり，指導者に不可欠の無我の姿勢をもっていなかった」[8]とし，「私がデニショーンや生徒に与えたものは，芸術的霊感であった」[9]と自己評価している。実務的能力にすぐれたショーンとデニスという美しいスターの存在なしには，デニショーンの隆盛は考えられない。

むすび

17年5ヶ月余にわたるデニショーンの公演に参加した舞踊家や芸術家は約155名，この間に約283作品を生みだし，公演日数は2,515日，公演地域は全米はもとよりヨーロッパ，東洋にまで及んでいる。活動の内訳は，コンサートとボードビルがおよそ半々になる。[10]当時アメリカを訪れてメトロポリタンで公演した舞踊団や舞踊家とは異なり，外部の援助や伝統的名声もないデニショーンが，活路を拓いていく唯一の道はボードビルの世界にあった。こうした大衆へのアピールが，また多くの弟子の全米への分散が，舞踊の観客を育て，アメリカの舞踊芸術の確立を導びいたのである。

デニショーンのプログラムは，彼らを支えてくれる大衆の嗜好に適応したものであったといえる。しかし単に観客の求める娯楽的色彩の濃い内容を与えるだけではなく，大衆が望んでいる以上の芸術水準にまでひきあげ，芸術性の強い舞踊を愛好する気風を醸成しようとする啓蒙の姿勢をもっていた。デニショーンにとって舞台は思想を伝導する場であり，観客を教育する場であり，芸術追求の場であった。その熱意のほどは，活発な公演活動の様相から充分に感じとれる。

註 1. Cristena L. Schlundt, The Role of Ruth St. Denis in the History of American Dancing, New York, P.118, P.143, P.145, 1958.
2. Baird Hastings, The Denishawn Era, Dance Index, No.6, P.93, June 1942.
3. Ted Shawn, Ruth St. Denis: Pioneer and Prophet, I., P.88, San Francisco, 1920.
4. Ted Shawn, 前掲書, P.89.
5.～7. Ruth St. Denis, An Unfinished Life, P.172, Harper & Brothers, 1939. (Dance Horizons Repub., 1969)
8.～9. Ruth St. Denis, 前掲書, P.188.
10. これらの考察，並びに表1は，C. L. Schlundt, The Professional Appearances of Ruth St. Denis and Ted Shawn, New York Pubic Library, 1962 をもとに数量計算し表を作成した。